

●二人で味わう古典和歌(53)

たまくしげ箱根のみうみけれあれやふたぐに掛けてなかにたゆたふ

源実朝

『金槐和歌集』の一首。

源実朝といえは、『金槐和歌集』といえは、だれもが「大海の磯もとどろよする波われてくだけてさけて散るかも」を思い出すことだろう。この勇壮な「われてくだけてさけて散るかも」に比べると、「たまくしげ」の歌はいぶん印象が異なる。

「たまくしげ」は「箱根」に掛かる枕詞であるが、「みうみけれあれや」って、なんだ？

注釈書によれば、「みうみ」は「水うみ」の略、あるいはまた「御湖みづうみ」ではないかとのこと。ここでは箱根山上の芦ノ湖である。そして、「けれ」は「心」の上代東国方言。「ココロ」が訛って「ケケレ」になったらしい。しかし、源実朝が訛っているとはどうしたことか。そのわけは、次の歌。



「甲斐が嶺たかねをさやにも見しがけれなく横ほり臥ふせるさやの中山」(東歌『古今和歌集』)。古来の民間歌謡を多く集めた巻二十に見える一首である。「甲斐の国の白根山をはつきりと見たいよ。心なくも横になって寝そべっている夜の中山さん、邪魔だからどいてよ」というおもしろい歌つまり、「けれなく」寝そべっている佐夜の中山に比べ、芦ノ湖は「けれあれや」となったのだ。

「箱根の湖には心があるからか、相模と駿河の二国にまたがり、ゆたかに水を湛えて揺れ動いていることだ」。

なるほど、さすが実朝である。

京との対立的状況のなかでの、作者の胸中が反映した一首との見方もあるが、それではせっかくの趣向が少々色褪せてしまう。難所を越えて箱根山頂に立った、青年歌人・実朝のゆたかな詩精神を味わいたい。建暦三(一一二二)年正月、二十二歳のときの歌である。

それにしても、名門の武門の家が衰退してゆくとときに、和歌史に残る歌人が生まれる不思議を思う。大伴家持、紀貫之、そして源実朝。

(小島ゆかり)